



時は流れて②

週刊朝日の連載マンガ「**パパはなんだかわからない**」には、いつも相槌を打ってほくそ笑んでいる私です。どこの家庭や会社でもありそうなサラリーマン群像をディフォルメしながら、ちょっとアウトサイダー社員たちの心の機微にわけ入る、そんな作者の**山科けいすけ**氏の才能には改めて脱帽！喜劇でありながらペーススあふれる作風は、8コマ漫画では唯一無二との評価もあるほどです。

ところで、主人公よりも一世代も古いデジタル化の光と影に翻弄される私にとっては、最近の「社会」「政治」「経済」の動きは、「**ジイジはなんだかわからない**」ことだらけなのです…。IT全盛の今日、理解しがたい出来事や世の中の動きには、「**浦島太郎状態**」に遭遇しているように思えてなりません。（「**浦島太郎状態**」：社会の変化への戸惑い 新しいコミュニケーションツールやプラットフォームに追いつけないとの焦。長期の海外滞在からの帰国 長期間海外（竜宮城を含む）に滞在した後、故郷の大きな変化に戸惑う感覚。そして、ビジネスシーンでの変化 長期間の休職や異動、海外赴任などから職場に戻った際に、業務プロセスや人間関係、オフィス環境の変化に適応できないと感じる状態。技術の進歩への対応 パソコンや特定のソフトウェアの操作方法が大きく変わり、以前の知識が通用しなくなっていると感じる状態。）

そんなことを日々考えると、改めて皆様方の「**事業承継問題**」の大切さと難しさを痛感している毎日です。

先月、中井貴一が主演を務めるテレビドラマ「**母の待つ里**」の地上波での再放送（NHK総合）がありました。昨年の同時期にNHK BSで放送された本作は、浅田次郎の同名小説を原作としたミステリアスファンタジー。都会で孤独に暮らす3人の“子供”が、同じ“母”の待つ故郷を訪ねる様が描かれています。私にとっては二度目の鑑賞なのですが、改めて秀作ドラマと評価させていただきました。ところで、**昨年の向日葵だより No.325号**でもご紹介したのですが、バックナンバーで確認しましたところ、同号でも「大谷」「大の里」にも触れながら、同様のコラムを書いていました。（ということは、今年も明るい話題としては、相変わらず「**大谷翔平**」「**大の里**」が中心なんですね…）

さて、拙宅が小学校のグラウンドに接しているため、まもなく**秋の大運動会**の練習の元気な声でにぎやかになります。かつての半分以上の生徒数までになったわが母校でも、一瞬“都会の学校では”と錯覚しそうな（方言や訛のない標準語での）進行係のアナウンスが聞こえてきます。本番当日は、1人の選手に6人の家族応援団のグループもありますので、瞬間的来場者数は相当なものになります。それでも、かつての運動会と違い、競技時間は短く午前で終了する学校がほとんどだそうです。そして、安全・授業との両立を図りながら種目も検討され、かつての花形種目だった**騎馬戦**などは消えてしまったようです。



いずれにしましても、天高く馬肥える秋の山形のメイン行事は、「芋煮会」であり「運動会」の催しであることには変わりないでしょう。

